

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷八十第

行發日一月五年三十正大

論叢

投資と租税……………法學博士 神戸 正雄

フォンウイゼの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

水戸藩常平倉の成立……………經濟學博士 本庄榮治郎

海運同盟に對する英吉利の態度……………法學士 小島昌太郎

時論

自作農地創定施設要項を評す……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

スミスの學說に關して福田博士の教を乞ふ……………經濟學士 谷口 吉彦

マルクスの勞賃論……………經濟學士 森 耕二郎

雜錄

スミスの植民地觀の由來と地位……………經濟學士 長田 三郎

マルクスの勞賃論 (一)

森 耕二郎

目次—緒言 第一 勞働力の價值(以上本號所載) 第二 勞働力の價格 結論

緒 言

嘗て述べたる如く、客觀的勞賃説(主觀的勞賃説及び勞賃の需要供給説に對す)は、遠くチユルゴーよりリカアドを経て、マルクスに至る間に於て、最低必要生活費説、リカアドの勞賃論(所謂勞賃鐵則説)、及びマルクスの勞賃論となつて、勞賃學史上極めて重要な地位を占めてゐるのであるが、それはマルクスの勞賃論に於て、客觀的勞賃論としてほゞ完成せる形をとるに至つたと認むることは、大體に於て當を得てゐると思はれる。随つて勞賃の本質を見んとするに當りて、客觀的勞賃論の是非を吟味する場合には、先づ以てマルクスの勞賃論を其論議の對象とすべきことは、正に當然であると云はねばならぬ。

次にマルクスの勞賃論は、或る意味に於て、彼れの經濟思想體系の基本を成してゐる。即ち彼にありては、餘剩價値の發生、資本蓄積の進行、及其行詰り等、資本主義制生産方法に特有の事象の闡明は、勞働力の價值及價格の問題より出發せられてゐる。故に彼れの經濟理論を正當に理

解せんごせば、先づ彼れの勞賃論の如何なるものなるかを瞭かに了解して置くことが必要であり、且つ又彼れの勞賃論の是非は、必然的に彼の全經濟理論に影響を及ぼさざるを得ないのである。

この二つの觀點より、私は本稿に於てマルクスの勞賃論の一般を研究して見やうとしたのである。然るに彼れの勞賃論は、他の經濟理論と同じやうに、彼れの全經濟思想體系の一部を成すものとして、諸所に散在してをり、それ自身教科書的に纏りたる體裁を備へて居らぬ結果、それを克く理解して統一的秩序的に述ぶることには、尠からざる困難が伴ふのを覺悟せねばならぬ。

さてマルクスの勞賃論には、私の見る所によれば、他の勞賃論に於けると異なり、勞働力の價値に就ての法則、即ち勞賃の基本的若くは靜的法則とも稱し得べきものと、勞働力價値の實現に就ての法則、即ち現實勞賃の法則若くは勞賃の動的法則とも稱し得べきものとの、二つの法則が見出される。而して斯様に二様の法則を立する態度は、已にいくらかはリカアドの勞賃論に於ても見らるゝ所であるが、しかしこの態度は、マルクスに至つて始めて明瞭に現はれ、彼獨特の立場より彼特有の勞賃法則となり得てゐるのである。この勞賃の基本的法則ならびに現實的法則を説くところの態度は、一般商品に於て、價値法則ならびに價格法則を主張する態度と同一であつて、要する所、マルクスは資本主義制生産方法の下における勞働力を一商品と見ることに徹底してゐると云ひ得らるゝのである。

勿論、勞働(力)を商品と見るべきか否か、従つて勞賃はその勞働(力)の代價と見るべきか否か

に就ては、從來屢々論議せられた。しかしながら私の見る所によれば、勞働(力)が、現今の資本主義制生産方法の下に於て、一の商品として交換市場に現はれることは、疑ふべくもないと思ふ。

しからはマルクスは果して如何なる理由により、勞働力を商品、而も特種なる商品と見たのであるか？ これに就て彼れの所説を吟味することは、彼れの勞賃論を理解するに向つての第一歩を成す。私は先づこの點に關し、私の見る所により、左に若干の考察を試みるであらう。

抑も生産物が商品として出現するためには、社會内部の分業が充分に發達してゐて、かの物々交換に端を發する所の使用價值と交換價值との分離が、已に完成されてゐることを前提とするのであるが、猶ほ其れは次の二條件に遵據することを必要とする。

(一)商品の交換者は、相互にその交換商品の私有權者たることを必要とする。

(二)交換すべき商品は、その所有者(即ち販賣者)にとつては、非使用價值でなければならぬが、その購買者にとつては使用價值でなければならぬ。

右の二條件を充たすことに依つて、生産物が商品として現はれる所の現象は、歴史的に多種多様な經濟的諸型態に共通のものであつて、必ずしも資本主義制生産方法に特有なるものではない。隨つて商品の分解は資本主義制生産方法そのものに關係なく可能である。然るに勞働力が一の商品として交換の目的物となること、即ち流通行程に於て、一方に貨幣所有者若くは生産手段の所有者があり、他方に自分自身の外何物をも所有せざる人々が存在してゐる事實は、何等の

1) cf. Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksaus. S. 47—8. (高島氏譯本第一卷第一册一〇四—六頁)。

自然的事實でなきは勿論、又多種多様な歴史的發達段階に共通の社會的關係でもない。それは資本主義制生産方法なる一の特種なる歴史的發達段階に於ける生産方法に特有なる事實である。それ故に商品の存在そのものは、決して資本主義制生産方法に特有なものではないが、勞働力が商品として現はれるのは資本主義制下に於てのみ見らるゝ所である。

而して資本主義制生産方法の下に於て、勞働力が商品となるには如何なる條件が必要であるか？ それはマルクスが明かに擧げてゐるやうに、左の二つの條件を必要とする。(これ等はさきに述べた一般商品交換の二條件に應當する)

(一) 勞働力の所有者がそれを商品として賣り出すためには、彼はそれを自由に處分することが出来なくてはならぬ。即ちその勞働能力の、その人格の、自由なる所有者でなければならぬ。

(二) 勞働力の所有者が、自分自身の勞働を體化したる諸商品を販賣する代りに、寧ろその生きた現身の中にのみ存するその勞働力そのものを、商品として賣物に出さねばならぬ。

マルクスは之等を要約して次の如く言つてゐる。

『貨幣を資本に轉化するためには、貨幣所有者は商品市場に自由勞働者を發見しなければならぬ。二重の意味に於ての自由勞働者、それは、勞働者が自由人として、彼れの勞働力を、彼れの商品として處分すると云ふ意味に於て、他方では、彼が、勞働力以外に賣るべき何等の商品を有せず、徒手空拳であつて、彼れの勞働力の實現に必要な一切の物から自由であること云ふ意味に於て。』¹⁾

1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksausg., S. 123—4. (高島氏譯本第一卷第一册二七六一九頁)。

かくて労働力は一の商品となるのであるが、併しマルクスに依れば、それは決して資本家的商品ではなく(單なる商品は姑く措く)、それとは異なる諸性質を有する所の、一の特種なる商品である。今この労働力商品の特殊性、その一般資本家的商品より相違せる性質を瞭らかならしむることは、労働力商品の本質を闡明する所以である。マルクスに依るに、労働力の具有せる特種なる性質と目すべきものとして、左の二つが數へらるゝ。(労働力商品と一般商品との相違點は從來屢々述べられてゐる。併しそれらに取扱はれてゐる相違點は、概ね單に物理的、自然的なるそれであつて、こゝに關係する所より離る¹⁾。)

(一)労働力なる商品の消費は、價値の創造を意味する。一般資本家的商品の消費は、それが享樂財の消費の場合に勿論、生産財の消費の場合と雖も、價値を創造、生産するものではない。只單に生産財の消費の場合に於て、労働の媒介により、それに含まれてゐる價値が、他の新生産物にその儘移轉するに過ぎない。この點はマルクス剩餘價値論の出發點を成す。(註)

(二)労働力の生産は、資本家的商品の如く、資本に依つて行はれ、剩餘價値生産を目的として爲されるものではない。それは人間の致富衝動に依つて行はるゝものでなく、人間の生殖本能に依つて自然的に爲されるものである。

(註)然るに一商品の消費から價値を引き出す爲には、我が貨幣所有者は幸にも、流通界の内部に於て、即ち市場に於て、使用價値そのものが價値の源泉であるといふ一種特別の性質を有する所の、即ち實際の消費がそれ自體に於て労働の體化であり價値創造である所の、一商品を發見しなければならぬ。そして貨幣所有者は市場にて、かくの如き特種の一商品を見出

1) 其一例、Boullieu, Traite theorque et pratique d'économie politique, 1912, tome II, p. 283—92.

す。勞働能力或は勞働力が即ちそれである。』¹⁾

かく勞働力商品は、其生産、消費の二方面に於て、一般資本家的商品とは異なる性質を有つてゐるのであるが、そが(一)の消費的方面に於て有する特殊性質は、茲に問題とする所に直接關係するところがないから姑く措く。しかるに(二)の生産的方面に於て、勞働力商品が一般資本家的商品とは異なる性質を有すことは、茲に吾々が問題とする所に密接な關係があるので、即ち其事は、之が價值、價格の問題を論ずるに當り、一般資本家的商品の價值、價格の問題を論ずる場合とは、自ら異なる考察をなすことを必要ならしめる。(註)例へば一般資本家的商品の價值と價格との一致如何に就ての提言が、そのまゝ勞働力商品の場合に當て嵌まるであらうとは云ひ得られないのである。私は次に此點について一言するであらう。

(註)勞働力商品が、一般資本家的商品とは異なりたる、以上述べたるが如き性質を有つて居るよりして、特にそれが價值ならばに價格の問題に就て、考究せらるべき問題としては、左の二つの問題、即ち

(一)勞働力の價值と價格との關係に就ての問題

(二)勞働力の價值決定に就ての問題

が擧げらるべきであらう。私は、前者を續言ならばに第二 勞働力の價格に於て、後者を第一 勞働力の價值に於て瞭らかにせんと努めた。

已に一般に知らるゝ如く、マルクスに依れば、一般商品は、彼れの價值法則によつて交換せらるゝのであるが、しかし資本主義社會に於ては(各種の生産部門における資本の有機的構成が異なる場合)、その外部的諸事情のために、價值法則の各個商品に現實にそのまゝ作用することが

1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksaus. S. 123. (高島氏譯本第一卷第一册二七五頁)。

攪亂せられて、各個商品は、必ずしも其價值通りに交換せられない。換言すれば、商品はそれに對する需要と供給とが相一致する場合と雖も、それに體化せる社會的平均勞働の分量に比例して交換されない。其故は資本主義社會に於ては、平均利潤率の法則が作用してゐるから、資本の構成の如何に關係なく、或る一定の總資本額に對して或る一定の割合の平均利潤が得らるゝからである。これ彼れの價值法則が、一般商品交換社會（資本主義社會もその一つ）に共通なる基本的、内部的、抽象的法則であると云はるゝ所以である。

然らば特種なる商品である所の勞働力の價值と價格との一致の機構に就ても、右と同様のことが云ひ得らるゝかと云ふに、それは出來ない。蓋し前述せる如く、勞働力商品は資本家的商品でないから、そこに平均利潤率の法則の作用する筈がないからである。随つてマルクスの謂ふ所の價值と價格との一致を攪亂する理由は、即ちマルクスの價值法則が純然たる抽象的基本的法則としてのみ残る理由は、勞働力商品の場合には、一應失はれたことになるのである。

しかるにマルクスは、リカアドに従つて、人口の自然的増減により、勞働(力)に對する需要と供給とが調節せられ、勞賃は結局其自然價格に落付くと云ふ機構の存在を認めずして、勞賃變動の事情を資本制蓄積の一般的法則に求め、勞働力の價值が、長き期間に亘りて、其價格より離れる必然性の存在を主張する。かくて勞働力の價格は、一應そこに一般的平均利潤率の法則の作用せざるにより、其價值より背離することより免れたのであるが、其價值よりの背離の理由を資本制蓄積の一般的法則に見出して、こゝに純然たる抽象的概念として残ることになつたのであ

る、と私は思ふのである。かくマルクスの價值法則が、假令其理由には差異ありとするも、一般資本家的商品に於けると、勞働力商品に於けるとに論なく、一樣に、一の純抽象的內的法則として觀念せらるゝことは、その性質よりして素より當然であるであらう。猶ほこの勞働力商品の價值と價格との關係に就ては、**第二 勞働力の價格** に於て更に詳細に論ずる所あるであらう。

斯様な觀點に立ちつゝ、以下私は、**第一に勞働力の價值法則**、即ち勞賃の基本的法則に就て述べ、**第二に勞働力價值の實現に就ての法則**、即ち現實勞賃の法則に就て述べると云ふ方法により、マルクスの勞賃論を吟味して見たいと思ふのである。(註)

(註)マルクスの謂ふ所の價值概念は、資本家的社會に於ける階級的概念ではなく、廣く一般に普通社會的若くは超階級的價值概念であるとせられてゐる。而して勞働力の價值概念も、一般商品に於ける價值概念と同様に、右の範疇に屬すべきものであることは疑がない。しかるにリーブクネヒトは、マルクスに於ける勞働力の價值概念は、階級的なるそれであつて、普通社會的、超階級的なるそれではない、彼は、勞働力の價值を考へるに當り、重大なる誤謬を犯してゐると云ふ。そうして我が福田博士は、このリーブクネヒトの主張を裏書されて居らるゝやうである。しかし乍ら私は何故にマルクスの謂ふ所の勞働力の價值が、階級的なるそれであるかを解するに苦しむ。勞働力は、資本主義制生産方法の下に於て、生産手段の所有者と非所有者(勞働者)とが、階級的に分たれることにより、一種の商品として現はれる限り、それが價值はそれが生産に必要な勞働の分量により決定せらるゝのであつて、それが一商品として、一般價值法則の支配の下に立つことに何等不思議がない。この場合の價值決定は階級的のそれでも何でもない。只勞働力が商品として現はれる發生的原因が或る階級的なる社會事情に本づくに過ぎぬのであると思ふ。猶ほ此點に就ては更に改めて攻究するの機會を持つてであらう。左に參考のためこの點に就てのリーブクネヒトの所説の一斑を掲げる。

『マルクスは勞働力の價值を、其階級的な、社會的に條件付けられたる實際に充用された平均生産費に従つて、換言すれ

は、階級的平均生産條件に従つて測定してゐる。さればマルクスの謂ふ所の勞働力の價值は、階級的に定められたる價值であつて、普遍社會的に定められたる價值ではない。これは誤謬である。余は之を正して次の如く言ふ。全社會的平均生産條件が、總ての他の財の價值を定むる如く、勞働力の價值をも定めるのである。勞働力の價值たりとも決して階級的に定められる價值ではなく、普遍社會的に定められたる價值であらねばならぬ。勞働力の全社會的に定められたる平均價值が、生産及流通行程に於て妥當なので、それが即ち生産物に入り込むのである。しかし乍ら資本主義的交換客體(勞賃)は、この社會的平均價值によつて測定せらるゝのでなく、それは階級的「價值」、階級的經驗的生產條件、實際具體的に、階級的に、(社會的)平均に支出せられたる生産費に従つて測定せらるゝであらう。要する所、勞賃は決して價值等價ではなく、一のより少なき價值である。』

『マルクスの出發點は、其時々、社會的階級地位の歴史的具體的な立場これである。而してそれは勞働力の現實なる社會的價值の確定に對する出發點を成す。これ即ち一の階級的事實から一の全社會的事實を導き出さんとするものである。予はこれに反し、社會的平均生産力の決定には、全社會の(其經濟的作用に於ける)文化的全地位から出發すべしとするものであつて、これから現實價值、勞働力の尺度を得、而して勞働者は彼れの勞働力が價值する以上の價值を生ずるものでなくして、(但し階段の擴張、社會的富の蓄積は別である)勞働者は、より少き報酬を勞賃として、社會的全生産物中から受取るもので、それは決して支出せられたる勞働に對する等價ではないことを示さんとするものである。』

第一 勞働力の價值

(前論) 一般商品の價值、價格問題に於けると同じやうに、マルクスにありては、勞働力の價值論は、その勞賃論の基礎的理論を成すものであるが故に、彼れの勞賃論を検討するに當りては、先づ以て彼れの勞働力の價值に就ての所説を吟味することを必要とする。以下私は、本節に

- 1) Liebknecht, K., Studien über die Bewegungsgesetze der gesellschaftlichen Entwicklung, 1922, S. 247-8. 福田博士『リーブクネヒト獄中遺稿 マルクス價值論批評』(改造第五卷第三號八一-九頁)。
- 2) Liebknecht, a. a. O., S. 257. 福田博士同論文(改造同號一五一-六頁)。

於て勞働力の價值法則、即ち勞賃の基本的法則に就て彼れの説く所を見やうとするのである。

マルクスが、勞働と勞働力との觀念を嚴別して、勞働は、價值の實體であり、内在的尺度であるが、それ自身としては、何等の價值をも有して居らぬとして、勞働力なる觀念を甫めてたて、勞働力の價值を究明し、謂ふ所の勞賃は、即ち勞働力の價格であるとしてゐることは、彼れの勞賃論を取扱はんとするに際し、極めて重要な意義を有つてゐるのであるが、それは已に一般に知らるゝ所であつて、茲に改めて詳しく説明する迄もないであらう。

さて勞働力の價值は、マルクスに依れば、他の一般商品の價值に於けると同じ理法により決定せらるゝ。即ち勞働力も商品の一種であるから、一般商品と同じやうに、使用價值および交換價值を有してゐる。勞働力も其個々に従つて各々異なる使用價值を有してゐる。がしかしそれが商品として交換の目的物となる限り、之が使用價值としての使用價值は、經濟學の研究範圍の埒外に屬する。たゞ使用價值が經濟の根本形態に觸れる場合にのみ、それは經濟學の研究範圍に入り來る。すなはち使用價值は交換價值と呼ばれる所の一定の經濟關係の直接の實材的基礎を成すにこままるのである。だから勞働力の個々の使用價值は問題ではない。それは使用價值の質的差異の除去せられたる等價物としてのみ、即ち單純同種、抽象的なる價值としてのみ、經濟學研究の對象となり來る。簡單に云へば、勞働力の價值は、假令その使用價值（具體的若くは主觀的效用）は、個々の異なるつてゐても、それより離れて、普遍的、社會的、客觀的に決定せらるゝのである。このことはマルクスの價值論の根本的出發點であつて、今更茲に呷々する迄もなく、

廣く一般に知られてゐる所であるが、勞働力の價值決定の理法を正確に把握せんがためには、是非ともそれを善く理解しておかねばならぬと思はれるので、念のために述べて置く次第である。

右述べたる如く、且つ又後に詳しく述ぶる如く、勞働力の價值は、他の一般商品の價值と同様に決定せらるゝものであるが、しかし勞働力なる商品は、既に述べたる如く、資本家的商品とは異なる特種の商品である結果、其價值決定に際しても、資本家的商品に於けるとは異なる考察が必要となつて來る。以下私は、マルクスの勞働力の價值を論ずるに當り、勞働力の價值について特に考慮すべき特異の諸點を、主として顧みるに努めるであらう。

(本論) 勞働力の價值が如何にして決定せらるゝかに就て、マルクスは『資本論』に於て左の如く云ふ。

『勞働力の價值は他の總ての商品のそれと同じく、この特種の物品の生産随つて又再生産に必要な勞働時間に依つて決定される。勞働力は價值である限り、それに體化してゐる社會的平均勞働の一定量を代表するに過ぎぬ。勞働力は只生きた個人の力能としてのみ存在してゐる。故に勞働力の生産は生きた個人の存在を前提する。その個人の存在が一定してゐるとすれば、勞働力の生産は彼自身の再生産或は生存維持といふことに存してゐる。生きた個人は其生存維持の爲に、一定量の生活資料を必要とする。されば勞働力の生産に必要な勞働時間は、結局この生活資料の生産に必要な勞働時間に歸する。或は勞働力の價值は勞働力の所有者の生活維持に必要

なる生活資料の價值である。』¹⁾

マルクスの勞賃論の大要は、右の一文に善く示されてゐる。即ち彼に依れば、勞働力價值の決定は、他の一般商品の價值決定と同様に、其生産に必要な社會的平均勞働時間に依つて決定せらるゝのであるが、ただ勞働力なる商品の場合には、一般商品の場合に於けるとは異なり、その生産過程に於て現實に消費さるゝ勞働なるものはない。随つて其生産に發現したる所の勞働の分量に依つて、勞働力の價值を決定すると云ふは、無意義である。只單に直接勞働者によつて消費されたる生活資料に含まるゝ勞働の分量が、即ち其價值が、そのまゝ勞働力の價值決定に與かるのみであつて、結局勞働力の價值は、勞働者の生活維持に必要な生活資料の價值に等しいこととなる。換言すれば、勞働力なる商品は、其消費行程に於ては、餘剩價值を創造する所の唯一の源泉であるに拘はらず、流通行程に於て商品として賣られる限り、其價值は、餘剩勞働(價值)をそのうちに含むことなく、それが生産に費されたる勞働の分量、即ち生活資料に含まるゝ勞働の分量(價值)によつて決定せらるゝのである。

このことは、マルクスの價值法則が、勞働力商品に適用せらるゝに就て、一般資本家的商品に於けるとは異なる考察を必要ならしむる所以であるが、しかしマルクスの價值法則は、商品生産に於けるかゝる相違點に論なく、即ち其生産物が餘剩勞働(價值)を含むと否とに論なく(餘剩價值生産の目的のために、商品が生産せらるゝ場合であると否とに論なく)、商品一般に妥當すべきものであるから、右の事實を以て、マルクスの價值法則が、勞働力商品に適用せらるゝこと

1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksausg. S. 126. (高島氏譯本第一卷第一册二八三頁)。

を否認し、或は又尠くとも、或制限の下にそれに適用せらるゝことを示すものとなすは、マルクスの價值法則の眞意をよく理解せるものとは云ふことが出来ないと思ふ。それは、資本家的商品たるも、勞働力商品たるもに論なく、何等の制限なく一樣に妥當する。たゞ二者の間に於ては、商品價値の内容實體を成す所の勞働が、一方に於ては、餘剩勞働を含み、他方に於てはそれを含んで居らぬと云ふ、勞働そのもの、性質上の相違があるのみである。(註)

(註)マルクスに依れば、勞働力の價値は、それが生産に必要な勞働の分量——即ち勞働者の生活資料に含まる、勞働の分量——に依つて決定せらるゝものであるから、彼の勞賃論は、かの勞働(力)の價値を生活資料の價格によつて決定せんとする勞賃の生産費説とは、本質的に異なるものである。隨つて私は、マルクスの勞賃論を渾然生産費説と稱することは穩當ではないと思ふ。しかしながら勞働(力)の價値決定に際しては、一般商品の價値決定に於けるとは異なり、この二つの客觀的勞賃説は、俱に、只勞働者の生活資料の價値(又は價格)のみを考慮するに過ぎぬのであるから、そうして又この二つの勞賃説の異なる差異は、たゞ一は生活資料の價値を、他はその價格を、勞働(力)の價値決定要素として認めるに過ぎぬのであるから、マルクスの勞賃説を一種の生産費説と稱することは、強ち大呼して責むべきではない。とは云へ私は、兩者を分別するため、勞賃の生産費説に對して、マルクスの勞賃論を、例へば勞働生産費説若くは單にマルクスの勞賃論と呼ぶに若くはないと思ふ。

猶ほ『勞働力の所有者は死を免れない。それにも拘はらず、その所有者が常に市場にて見出されんが爲めには、常に貨幣が新に資本化される爲めにそれを必要とする如く、勞働力の販賣者は、「凡ての生きた個體を自ら不滅にすると同じやうに、生殖に依つて」、みづからを不滅にしなければならぬ。磨滅と死亡とのために市場から除かれた勞働力は、せめてそれと同數の新なる勞

働力に依つて、斷へず補充せられねばならぬ。故に特種の商品所有者たるこの種族が、商品市場に自らを不滅にするが爲めには、労働力の生産に必要な生活資料の高は、補充労働者即ち労働者の子女の生活資料をも含んでゐる。』¹⁾(註)

(註)この、謂ふ所の生活資料の中に子女若くは家族のそれを包含せしむるの考へは、マルクスに始まるものでなく、已に彼以前に現はれたる所の勞賃の客觀說若くは生産費說に於て、殆んど例外なく見る所であることは、今更茲に贅する迄もない。

以下私は、以上述べたるところの命題、即ち労働力の價値は、労働者の生活資料の價値を、言ひ換ふればそれに體化された社會的平均労働の一定量を、代表するものであるとの命題について、少しく詳細に分解論究せんとするのであるが、茲には生活資料に包含せる價値(若くは労働)そのものは、與へられたるものと見、其構成内容に迄立入つて穿鑿することは、一般價値論の領域に這入ることになるから、姑く之を控へるであらう。

(一)マルクスの茲に謂ふ所の生活資料(Lebensmittel)は、單に生理的最低必要生活資料を意味してゐない。それには文化的、道徳的、歴史的要素が含まれてゐる。

労働者の生活維持に必要な生活資料の分量とは、——労働力の所有者は、今日労働を爲し了へた後、明日は復た、力及健康の同じ條件の下に、同一行程を繰り返へし得なくてはならぬから、——労働する個人を労働する個人として其尋常の生活状態に維持しておくに足るものでなくてはならぬが、それは、マルクスに依れば、自然的及文化的要素より成つてゐる。彼は云ふ。

『衣、食、住、燃料等の如き自然的慾望そのものは、一國の風土的其他の自然的特徴に従つて

1) Marx, a. a. O., S. 127. (高島氏譯本同冊二八五頁)。

様々である。他方に於て謂ゆる必要なる欲望の範圍は、それを充たす方法と同じく、それ自身一の歴史的産物であつて、随つて大部分は一國の文化程度、就中また本質的には、自由労働者の階級が如何なる條件の下に、また随つて如何なる習慣と生活上の要求とを以て形成されたかに懸つてゐる。されば労働力の價值決定は、他の諸商品の場合と反對に、一の歴史的及道德的要素を含んでゐる。しかし一定の國にとつて、一定の時期に於ては、必要なる生活資料の平均範圍は一定のものである。』¹⁾

彼は更に他の場所に於ても、右とほゞ同様のことを云つてゐる。それに曰く。

『彼の労働力の現實的價值は、この肉體的最低限と一致するものではなく、風土や社會的發達の狀態によつて種々様々である。それは、單に肉體的欲望に依つて左右されるのみでなく、又第二の自然となる所の歴史的に發達したる社會的欲望に依つても左右されるのである。しかし如何なる國に於ても、與へられたる一時期に就て云へば、此調節的なる平均的勞賃は、一の與へられたる大きさである。』²⁾ (註)

(註) 同様の意義ある章句は、マルクスの著作の他の個所にも見出される。例へば『勞賃、價格及び利潤』には左の如き言葉がある。

しかし労働力の價值又は労働の價值には若干の特徴があつて、總ての他の商品の價值と區別する所がある。労働力の價值は二つの要素——一は單に生理的のもの、他は歴史的又は社會的のもの——によつて形成せられる。其窮極の限度は生理的要素によつて決定せられる、言ひ換ふれば、労働者階級はそれ自身を維持し且つ覆生産し、其生理的存在を永續して行くた

1) Marx, a. a. O., S. 127. (高島氏譯本同冊二八四頁)。

2) Marx, Das Kapital, Bd. III, 2, S. 395. (高島氏譯本第三卷第四冊四〇一—二頁)。

めに、生存及繁殖に絶對的缺くべからざる必要品を受取らねばならぬ。だから此等缺くべからざる必要品の價值は、勞働の價值の窮極限度を形造る。……

『この單なる生理的要素に加へて、勞働の價值は如何なる國に於ては因襲的の生活標準によつて決定せられる。それは(因襲的の生活は)單なる生理的の生活ではなくて、人々がその下に置かれ且つ其の下で育てられる所の、社會的諸條件から出てくる一定の欲望の満足である。……』

『勞働の價值の中に這入り込む所の、この歴史的又は社會的の要素は、擴げること出来れば、縮めることも出来、或は生理的限度しか何物も残らぬやうに、全く無くして仕舞ふことも出来る。……』

『諸君は違つた國々に於ける標準勞賃又は勞働の價值を比較することにより、又同じ國の違つた歴史時代について之を比較することにより、勞働の價值そのものは——たとひ總ての他の商品の價值は不變のまゝであると假定しても——固定しない、可變的の大きさのものだ、と云ふことを發見するべであらう。』¹⁾

猶ほ他に左の如き彼れの言葉もあつて、謂ふ所の生活資料とは、決して自然的生理的のものでないことを瞭らかにしてゐる。

『勞働力の價值の最終限界或は最低限界は、其日々の供給なくんば、勞働力の負擔者即ち人間が其生活行程を新にすることが出来ない所の一の商品量の價值、即ち肉體上缺くべからざる生活資料の價值に依つて形成される。勞働力の價格がこの最低限界迄低落する時は、それは勞働力の價值以下に低落する譯である。何故なれば勞働力は、かくてはたゞ不具の形態に於てのみ維持され發展され得るに過ぎぬからである。然るに各商品の價值は、其商品を尋當の品質のものに産出するに必要なる勞働時間に依つて決定されてゐる。』²⁾

『勞働力の價值は、平均勞働者の習慣的に必要なる生活資料の價值によつて定まる。この生活資料は形態こそ變はれ、其分量は一定社會の一定時代に於ては一定してゐる。随つて不變の大きさとして取扱ふべきものである。變化するのはこの分量の價值である。』³⁾

- 1) Marx, Value, Price and Profit, National Labour Press ed. pp. 48—9. (河上博士譯本一七〇—一三頁同譯に據る 以下同じ)。
- 2) Marx, Das Kapital, Bd. I, S. 128. (高島氏譯本第一卷第一册二八七—八頁)。
- 3) Marx, a. a. O., S. 456. (高島氏譯本第一卷第二册四二三頁)。

猶ほマルクスに依れば、労働力の價值に與かる所のものには、獨り労働者の生活資料があるのみならず、労働者が一定の技術熟練を習得するに必要な教育費がある。此點に關し彼は左の如く云ふ。

『一般的なる人間の本性を改造し、そが一定の労働部門に於て、熟練と手際とを獲得して、發達した特種の労働力となるやうにするには、一定の修練若くは教育が必要である。そして此修練若くは教育はまた商品等價の大なり小なりの高を必要とする。労働力の複雑性の大小に應じて其教育費は様々である。かくてこの教育費は普通の労働力に對してはホンの小額ではあるとは云へ、その生産に支出された諸價値の範圍内に這入つて行くのである。』¹⁾

『されば國民的諸勞賃を比較するに當つては、労働力の價値大小に於ける變化を決定する一切の諸原因、即ち自然的並に歴史的に發達したる第一次生活必要品の價格及範圍、労働者の教育費、婦人並に兒童労働の役割、労働の生産力、労働の時間的並に能率的大小等を考慮せねばならぬ。』²⁾ (註)

なほ此點に就ては、本節の(三)に於て單純労働力、複雑労働力を考慮する際、詳しく述べ所あるであらう。

(註)『然らば労働(力)そのもの、生産費とは何であるか？』

それは、労働者が労働者として生計を營むため、且つ彼を労働者に教育するため、必要とせらるゝ費用である。³⁾

『そののみならず彼の労働力を發達させ、一定の熟練を習得するが爲には、價値の他の部分が費されなければならぬ。尤

1) Marx, a. a. O., S. 127. (高島氏譯本同卷第一册二八五一六頁)。

2) Marx, a. a. O., S. 494. (高島氏譯本第一卷第二册五〇三頁)。

3) Marx, Arbeitlohn und Kapital, v. K. Kautsky, S. 23.

も吾々の目的に向つては單に平均勞働を考慮すれば足りる。さうして此等のもの、教育と發達とに要する費用は段々と其額を減じつゝある。』¹⁾

斯くの如く、マルクスに依れば、勞働力の價值決定に與かる所の生活資料とは、決して自然的、生理的、個々のものに非らずして、歴史的、道德的、可動的のものであるが、このことは、彼が勞働力の價值を文化的社會的に決定せんとすることを意味するものであつて、吾々はこれにより、マルクスの謂ふ所の價值内容の如何なるものなるかを想像することが出来るのである。而して勞働力の價值決定に與かる所の生活資料が、勞賃學說史上、自然的生理的なるそれを意味することより離れ、歴史的道德的のそれを意味するに至つたことにより、勞働力の價值内容が如何に變化するに至つたかは、既に私が拙稿『客觀的勞賃說の史的發展』に於て、チュルゴ、リカアド、及びマルクス初期の勞賃論に就て若干詳述して置いた所である。

(二) 或る一定種類の勞働力の價值は、社會的に平均なる或る一定の生活資料の價值である。

或る一定種類の商品の價值は、其商品の生産に實際に個々に發現せられたる勞働の分量如何に關係なく、それは其種類の商品の生産に發現せらるべき、社會的に必要なる平均勞働の分量若くは時間を體現せるものとして、社會的普遍的に決定せらるゝものであるといふ、一般商品の價值決定に關する命題は、同様に勞働力の價值決定の場合にも當て嵌まる。即ち或る一定種類の勞働力は、假令個々的には、種々異なつた勞働の分量、即ち生活資料に含まるゝ分量を體化してあるとも、其價值は、社會的に必要なる平均生活資料の價值として現はされる。例へば紡績勞働者

1) Marx, Value, Price and Profit, pp. 30—1. (河上博士譯本一三一頁)。

の勞働力の價値は、個々的な紡績勞働者の生活資料幾何に關係なく、或る一定の時、所に於ては、社會的に普遍的なる一様の價値を有つてゐるのである。マルクスは斯様に考へたのであるが、此立合は、個々の勞働力又は個々企業に於ける一群の勞働力に就て、個々のに勞働(力)の價値、價格を求めんとする立場と反對に立つてゐる。マルクスに依れば、社會の型態が發達して、勞働力の外何物をも有たぬ勞働者が發生して來ると、勞働力は只之を賣らんがために生産されることゝ觀念せられて、他の商品と同じく流通行程に現はれることゝなる。しかる時は、或る同種類の勞働力の價値は、個々のなる具體的なる使用價値若くは效用より離るゝは勿論、その個々のなる勞働力の生産費より離れて、そこに社會的普遍的なる標準的勞働力の客觀的なる價値の概念が想定せらるゝやうになるのである。猶ほこのマルクスの態度は、勞働(力)の價値をその限界的生産費により決定せんとする立場とも、反對に立つてゐることを注意せねばならぬ。

しかし乍ら右に云ふ所は、或る一定の同じ種類の勞働力に就て、異なれる種類の勞働力に就ては、かく云ふことが出来ない。異なれる種類の勞働力は、各々それが生産に必要な、相互に異なる勞働の分量、即ち生活資料の分量に依つて、其價値を決定される。マルクスはこの點に就て左の如く云つてゐる。

『しかし此機會に述べて置かねばならぬことは、異なる質の勞働を生産する費用は同じでないから、従つて種々の事業に使用せらるゝ勞働力の價値も亦相違しなければならぬと云ふことだ。だから勞賃の平等を要求する叫聲は、一の謬想に本づくもので、それは到底實現され得ざる

無稽の願望だ。それは前提を受け入れて而も結論を避けんとする、かの謬れる且つ淺薄なる急進論の所産である。勞賃制度の基礎の上では、勞働力は一切の他の商品の其れの如く決定される。さうして異なる種類の勞働力は異なる價值を有するが故に、即ち其等の生産に異なる分量の勞働を必要とするが故に、其等のものは勞働市場に於て異なる價格を附せられねばならぬ。勞賃制度の基礎の上に立つて平等の報酬を要求するのは、——或は單に公平の報酬を要求するのさへ——それは奴隸制度の基礎の上に立つて自由を要求するのと同じである。……」¹⁾

(三)より多くの勞働を支出する高級勞働力は、より多くの勞働を、生活資料を、その生産に費消してゐる。従つてその價值は高い。

マルクスに在つては、商品の價值は社會的に必要なる人間勞働の分量に依つて決定せらるゝと云ふのであつて、即ち抽象的人間勞働のみが(有用的具體的勞働に對す)價值の構成に與かるものとされ、勞働の異質を排して其質的單純化が主張せられてゐる。而して彼は勞働をかく質的に同一である抽象的人間勞働に還元したる後、只量的に價值の大小を測定しやうとする。かくて複雑勞働若くは高級勞働が、平均的なる單純勞働に量的に比較せらるゝことになる。本節の(二)に於て一言した所の、異種類の勞働力がそれ〳〵異なる價值を有することは、右述べたる意味に於て、それ等が只量的にのみ考量されたる結果なのである。

今此問題に就て若干の考察を試みんに、複雑勞働若くは高級勞働を支出する勞働力の價值は、より單純なる勞働を支出する勞働力の價值より、より一層大なるものであるが、それは前者が後

1) Marx, Value, Price and Profit, p. 30. (河上博士譯本一三一一二頁)。

者より、多くの労働量を支出するが爲であると云はんよりは其生産により、多くの労働が費消されてゐるからである云ふべきである。彼は云ふ。

『社會的平均労働に比べて、より高級な、より複雑な労働と看做される労働は、單純な労働力の場合よりも、より高い教育費が入り込み、其生産には、より多くの労働時間がかゝり、随つてより高い價値を有してゐる一労働力の示現である。この力の價値がより高いときは、この力は随つてまたより高級の労働に示現され、随つて同じ期間に於ては、比較的より高い價値に體現される。』¹⁾

『しかし、より強度の活力度、より大なる獨特の重要さを有つて居るよりして、平均的水準以上に傑出せる複雑労働に就てはどうであるか？ この種の複雑労働もこれを構成する單純労働に分解することが出来る。即ち複雑労働は、より高い強度を有する單純労働に外ならない。従つて例へば複雑労働の一日は、單純労働の三日に匹敵するのである。』²⁾ (註)

以上引用する所により、複雑労働と單純労働とを對立させる意義が、大體瞭らかになつたと思ふのであるが、この二つの對立が、具體的有用労働と抽象的人間労働との對立と、如何なる點に於て異なるかは、前に一言しておいた。前者の對立は抽象的人間労働の中に於けるそれである。猶ほ複雑労働と單純労働との對立は、肉體的労働と精神的労働とのそれと、同じくないことを注意しなければならぬ。

(註) 同じ意義を有せる章句は(二)に引用せるもの外、他の個所にも見出される。その二三を引用紹介すること左の如し。

『他方に各價値形成行程に於て、より高級な労働は常に社會的平均労働に約元されなければならぬ。高級労働一日は、

1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksaus. S. 152. (高島氏譯本第一卷第一册三四〇—一頁)。
2) Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, 8 Aufl., S. 6.

例へば單純勞働二日に約元されなければならぬ。……されば資本に使用される勞働者は、單純なる社會的平均勞働をするものと假定することに依つて、我々は餘計な運算を省き分解を簡單にするのである』¹⁾

『複雑なる勞働は畢竟只強められた、(potenzierte) 或は寧ろ倍加した、(multiplizierte) 單純勞働として通用するのみである。随つて少量の複雑勞働は多量の單純勞働に等しきものである。此換算が絶へず行はれることは經驗の示す所である。一の商品は最も複雑なる勞働の所産であらうとも、其價值はそれを單純勞働の生産物と等しからしめ、かくてみづから單純勞働の一定の量を代表するに過ぎぬ。勞働の各異なれる種類が、其尺度單位としての單純勞働に換算せらるゝ種々なる比例は、生産者の背後に於ける社會的行程に依つて定められるもので、随つて生産者にとつては、習慣によつて定められるやうに見える。以下論旨の簡明を期するため、各種の勞働力を直ちに單純なる勞働力と看做す。但しこれは唯だ換算の勞を省く丈けに過ぎぬ。』²⁾

以上述べたるところに依り、私は、勞働力の價值が如何に決定せらるゝかについて、マルクスの説く所を大體瞭らかにするを得たかと思ふ。

既に述べたる所により知らるゝ如く、勞働力の價值は勞働者の生活資料の價值に依つて決定せられ、而して勞賃は勞働力の價格であるから、生活資料の價值が上れば勞働力の價值従つて又勞賃は上り、それと反對に生活資料の價值が下れば勞働力の價值従つて又勞賃は下るのであるが、然らば現今の生産方法の下に於て、勞働力の價值の社會的總價值に對する割合關係は如何であるか？ このことはマルクスの所謂相對的餘剩價值の生産の問題に關聯する所であつて、私は既に拙稿『勞働生産力と勞賃』に於て可成詳しく論じて置いた所であるが、要するにマルクスに依れば、現今の資本主義制生産方法の下に於ては、大規模生産、資本の集中及勞働の結合、分業の發

- 1) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksausg., S. 153. (高島氏譯本第一卷第一册三四三頁)。
- 2) Marx, a. a. O., S. 11—2. (高島氏譯本同册二—二頁)。
- 3) 本誌第十六卷第四、五號所載。

達、凡ゆる機械器具の發明發見等の結果、労働の生産力は益々増大し、生産物の價値は下落し、従つて労働者の生活資料の價値は下がり、労働力の價値随つて賃賃はそれに伴ひ下落するに至る、即ち労働生産力の増大に逆比例に賃賃は下落するのであつて、労働者の生活資料の分量は絶對的には不動であるとしても、又は幾分か増加することがあるとしても、その價値量は社會的生産物の總價値量に比較して相對的に減少することゝなるのである。かくて彼れの賃賃の基本的法則(即ち労働力の價値法則)は、社會所得分配の關係より見て、労働者階級に對し、極めて悲觀的なるものと云はねばならぬ。

(餘論) 右述べたる所のマルクスの労働力の價値法則は、リカアドに於ては——其内容に於て著しく異なつてはゐるが、——労働の自然價格に就ての法則となつて現はれてゐる。而して此のリカアドの抽象的にして自然法則的なる賃賃法則に對しては、其後幾多の反對説が現はれた。古くは獨逸歴史派、近くはディール、シュトルツマン等の所謂社會的法的經濟學派は共に、かゝる抽象的賃賃法則の經濟學に於て許容し難きことを主張してゐる。例へばディールは、複雑極りなき賃賃現象の裡に單一なる抽象的賃賃法則を發見せんとするは到底不可能である、たゞ一定の社會形態に於ける法的社會的事象に制約せられたる賃賃運動の發達傾向(Entwicklungstendenzen)、若くは規則性(Regelmässigkeiten)を見出し得るのみである、と云ふ。なる程、正統學派の、殊にリカアドの賃賃法則の如く、私有財産制度、自由契約、自由競争などの如き社會制度の歴史的性

1) Diehl, K., Theoretische Nationalökonomie, Einleitung in die Nationalökonomie, 1916, S. 195—6, 399 ff.

質を意識することなくして、その裡に生起せる勞賃現象から抽象したる勞賃法則は、多分に自然法則なる色彩を有つてゐることは争はれない¹⁾。そうしてそれが經濟學に於て許さるべきものでないことも明らかである。

しかし乍ら、右と同様なる非難がマルクスの謂ふ所の勞賃法則に就ても値ひするとは云ふことが出來ない。彼は彼自ら、凡ゆる社會制度に妥當なる抽象的經濟法則の存在を否認してゐる。このことは彼が、『資本論』第一卷第二版の彼れの序文中に引用せる、而して彼自身裏書きせる、左の章句によつても明かである。

『しかし乍ら人或は言ふであらう。經濟上の一般的諸法則は、それが現在に應用されると過去に應用されるを問はず、總て同一のものである。これこそマルクスが斷然否認するところである。マルクスに依れば、かくの如き抽象的法則は存在せぬのである。……彼の説によれば、却つて反對に、總ての歴史的時期は、いづれもその獨特の諸法則を有してゐる。……人類の生活が一定の發達時期を越えると同時に、即ち一の段階から他の段階に進み入ると同時に、それは又從來とは別箇の諸法則に支配され始まる。……：……舊經濟學派が經濟的諸法則を物理化學の諸法則に擬したのは、全くその性質を無視したものである。』²⁾

このマルクスの立場は、已に一般に知らるゝ所であつて今更暇々する迄もあるまい。かくマルクスは、總ゆる社會の發達形態に妥當なる經濟法則の存在を否認するものであるが、しかし彼が、或る一定の歴史的發達段階に於ける經濟現象の裡に、その發達段階の基本的性質に

1) 拙稿『客觀的勞賃論の史的發展』(本誌第十八卷第四號所載)參照。
 2) Marx, Das Kapital, Bd. I, Volksausg., 2 Aufl.'s Vorwort. (高島氏譯本第一卷第一冊序八頁)。

制約せられたる、而してその現象にのみ妥當なる、一種の抽象的經濟法則の存在を信するものであることを看過してはならない。例へば彼は、一の歴史的發達階段である所の商品交換社會（資本主義社會もその一つ）の裡に生起する價格現象より、その社會の內的基本的性質に規制せられたる、而してその現象にのみ妥當なる一の價值法則を抽象しやうとする。そうして彼は、かゝる價值法則を、一の商品交換現象である所の勞賃現象の裡に見出さうとして、それを以上述べたるが如き、勞働力の價值法則に於て見出したのである。歴史派經濟學は姑く措き、法的社會經濟學派が、因果的自然法則的なる抽象的勞賃法則を排するはよし、總ゆる抽象的規範的勞賃法則を認めざらんとするに急なるは、吾々の遽かに賛成すること能はざる所である。

以上述べたる所は、マルクスの謂ふ所の勞賃の基本的法則、即ち勞働力の價值法則に就て、あるが、右の法則の外に彼は、現實勞賃の法則を取扱ふことを忘れなかつた。そうしてこの法則を瞭らかにすることは、勞働力の價值が如何にして實現するかの問題を成す、マルクスにありては、勞働力の價值は必然的に現實にそのまゝ、價格に實現するものではない、價值は價格と常に一致するものではない。價格は價值と離れ得る。勞賃即ち勞働力の價格は、勞働力に對する需要が其供給に超過する時は、其價值より離れて上り、其供給が需要に超過する時は、其價值より下がる。現實の事實はその孰れかの場合であることを普通とする。勞働力の價值と價格が一致すること、即ち其價值がそのまゝ、價格に實現せらるゝことは、勞働力に對する需要と供給とが相一致し

たる時に限られると云ふ。唯だしかし價值と價格との觀念を勞働力なる商品に認め、其價值より價格を説明せんとするからには、當然に假令外部的事情により、勞働力の價格が價值より離れてそれを上下することあるも、結局價格の本質的に價值により支配せらるゝものなることを否認するものでないことは勿論である。

而して現今の資本主義制生産方法の下に於て、勞働力なる商品の價格は、其價值に支配されつつ、而も如何にして、何故に、それより離るゝか？　この理由を説明することは、資本主義制生産方法の下に於ける勞働力に對する需要供給により動く所の、現實勞賃に就ての法則（この勞賃の需要供給法則の歴史的性質を瞭らかにしやうとしたのは、唯マルクス一人のみである）を闡明する所以であつて、マルクスは、それを『資本論』第一卷第二十三章資本制蓄積の一般的法則の下に於て、詳さに論究してゐる。私は左に節を改めてそれを考察するであらう。